

桑原武夫編

一言一日

—人類の知恵—



岩波新書

F 83



桑原武夫編

一日一言

—人類の知恵—

262

桑原武夫

1904年福井県に生まれる

1928年京都大学文学部卒業

専攻—仏文学

現在—京都大学名誉教授

著書—「文学入門」「ルソー」(編著)(以上岩波新書)

「文学序説」(岩波全書)

訳書—アラン「諸芸術の体系」スタンダール「赤と黒」

「カストロの尼」

一日一言

岩波新書(青版) 262

1956年12月10日 第1刷発行 ©

1980年3月10日 第35刷発行

¥ 320

編 者 ^{くわ}桑 ^{ばら}原 ^{たけ}武 ^お夫

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

は し が き

人間の尊ぶべきは、その行為にある、というのは、あくまで正しい。しかし、人間は言語というものをもっており、これによって自己の行為を他の人々の行為に結びつけ、そこに協力の可能性を生み出すのみでなく、自らなすべき、または、なした行為を、これによって考慮し、また反省するのである。言語に支えられぬ人間行為はありえない。そして言語をもつ人類のみが歴史をもち、その歴史は、人類文化の各分野において偉大な行為をなした人々の言葉によって飾られている。それらの言葉は、もとより歴史的社会的条件に規制されているが、しかも、そこにふくまれる知恵は、そうした条件を越えて、後の人々の心によき刺戟をあたえ、思想を強壮にし、よき新行為の源泉となることを決してやめない。これが人類の知恵である。人類の一員として立派に生きるということは、この古くて新しい知恵の泉からいかに汲みとるかにかかるといふことである。

いたらぬ私自身をかえりみても、長年の読書のうちに、深く心にせまった幾十かの言葉を、いつしか記憶のうちにたくわえている。そして、それらの言葉が意識の深いところで私の生活を支えていることを感じざるをえない。もし、こうした支えがなければ、私の生活は一そう貧弱なものとなったに違いないのである。今回、岩波新書の一冊として、人類史上の名家の語録を、新しい形式のもとに編集するこ

とを求められたさい、私がただちに賛成したのは、それが人々の役に立つだろうことを疑わなかったからである。

本書において私たちは、ただ、すぐれた言葉を思いつくままに無秩序に集めるのではなく、一年、三百六十六の日々に、それぞれその日にゆかりのある人物の言葉を収録し、略伝と肖像とをそえ、読者諸君が、毎日一つずつの言葉を深く味わいうるようにしたいと思った。美術の生産もまた人類の偉大な行為であるから、それをもって言葉にかえる日もこしらえた。

歴史上の人物の生歿など日付確定は、暦法のちがいなどもあって、きわめて困難な仕事である。厳密を期すれば、それだけで一つの学的研究となるだろう。しかし、本書は歴史学の専門書ではないから、一般の通説にしたがった場合も多い。また、いろいろ異説があるさいに、人物採用上の便宜によってきめたこともあり、いささか学的厳密さに欠ける点も生じた。諒せられたい。

古代、中世の人々には、日付不明のものが多く。そういう偉人は、適当な人物を割当てにくい日々に、日付と無関係に入れることにした（その場合は、略伝の最初に＊印をつけて区別してある）。

一日に一人という原則を守るために、割愛のやむなきに至ったものも多い。いうまでもなく、この本は史上の人物または事件を、その偉大さの順番にしたがって、三百六十六えらんだのではない。偉大さの順番などということとは、もとよりありえぬが、たとえば、ヘーゲルが入らずに坂口安吾が採用されていることは、ドイツの哲学者が日本の小説家に劣る、という意味では決してない。すべて選択にあたっ

ては、けっきょく私の好みによって決定する他はなくなることが多く、そのさい私は好みをあえて抑えようとはしなかった。こういう本は幾種もあってよいので、ほかの人々がそれぞれの好みから編集されることが望ましいのである。

日本の現存者は採らぬことにしたが、この原則は外国人には適用しない。
中国に関するものの多くは新訳だが、それ以外の外国人については、自ら訳したほか、定評ある反訳を利用させてもらった場合も多い。そのさい一定のワクの中に入れるために、若干の削除、修正は不可避であった。

日本人の文章については、読みやすくするために、とくに詩的なもの以外は、すべて現代かなづかいに改めた。漢字を改め、送りがなを加えた場合もある。文章の移り変りの早い日本では、明治初期のものすら、一般の人々には今日すでに読みづらくなっている。学術書は別として、一般書の場合、いたずらに原形に執着するよりも、若干の操作を加えることによって、これを今日の日本人に親しみやすくすることこそ、民族文化を発展的に継承するゆえんだ、と私は考えている。

出典はできるだけ明記したが、すぐれた言葉を、その出所が明らかでないというだけの理由で、排除することはしなかった。

美術については、富岡家が鉄斎の絶筆の撮影をとくに許されたほか、平凡社、河出書房その他は、それぞれの出版物からの再録を認められた。ここに特記して感謝する。

いうまでもなく、この仕事は私一人の手にあまった。そこで、中国関係全般にわたって配慮をねがっ

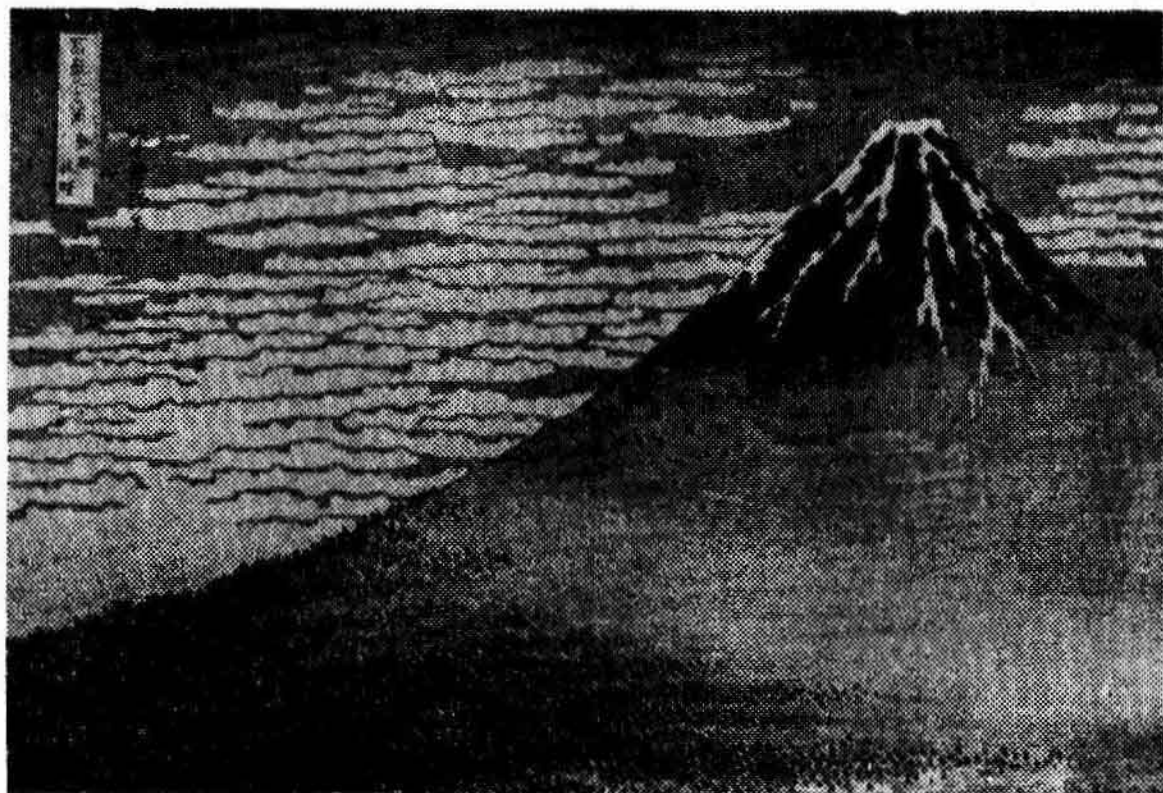
た平岡武夫氏をはじめ、一々ここに貴名をしるさないが、京大・人文科学研究所内外の友人諸君の協力をあおいだ。また、肖像と筆蹟の選定には、松島栄一氏その他、多くの方々の好意ある御援助をえることができた。もし本書に、従来の類書と異なる新しさがあるとするれば、それはこれらの人々の友情と、新書編集部の中島義勝、田村義也、吉野祥子三氏等の熱心な助力との、たまものである。深く感謝する。

一九五六年秋

桑 原 武 夫

1月





1 月 1 日

天地の 分れし時ゆ

神さびて 高き貴き

駿河なる 富士の高嶺を

天の原 ふり放け見れば

渡る日の 影も隠ろひ

照る月の 光も見えず

白雲も い行き憚り

時じくぞ 雪は降りける

語りつぎ 言ひつぎ行かむ

富士の高嶺は

田子の浦ゆ打出でて見ればま白にぞ
富士の高嶺に雪は降りける

(山部赤人)

図は葛飾北斎筆



キ ケ ロ

(B.C. 106—43)

この日アルビヌムに生まれる。ローマの雄弁家、政治家、哲学者。共和制の擁護のため、政治的精力を傾倒したが、破れ、殺された。

2 日

いかに多くの美点があるかを判断することができけるわけだ。

(友情論)

もし人が、この世界から、人間を結合している親切のきずなをたち切ってしまうならば、どんな家も、どんな都市も存続することができない。もしこれを充分に理解することが困難ならば、争いや不和を見て、人は、友情と和合との力が、いかに大きいものであるかを、さとることができであろう。なぜなら、憎悪と争いによっても、根底からくつがえされることを、なお免れているような非常に堅実な家とか、非常に基礎のかたい都市とか、一体どこにあるだろうか。これによっても友情には、

3 日

しりを受けたとき、いつも、この点について自己反省した。

(『顔氏家訓』 名実篇)

人間の足がふむ広さは、わずか数寸にすぎないのに、一尺ほどもある路で、きまって崖からつまずいて落ちるし、ひとかかえもある丸木橋で、かならず川に落ちておぼれるというのは、なぜか。そのかわりに余地がないからである。君子が世に立って行く場合も、まったく同じこと。真実のこもったことばも、人に信用してもらえず、天地に恥じぬ行いも、人から疑われることもある。みな、自己の言行・名

趙岐江先生注

顔氏家訓

抱經堂校補

推 之 顔

(531—602?)

*南北朝時代の学者。儒教と仏教との調和を試みた。『顔氏家訓』は、人間いかに生くべきかを家族中心の立場から述べた。



ニュートン

(1643—1727)

この日生まれたイギリスの大科学者。万有引力、光の分解、微積分法を発見して、近代の物理・数学・天文学の基礎をきづいた。

自然哲学〔自然科学〕は、自然の粹とはたらきとを発見し、それらを可能なかぎり一般的な規則または法則に還元すること——これらの規則を観察と実験によって確立し、そこから事物の原因および結果をひきだすこと、のうちに存する。(王立協会設立試案)

わたしは自分が世間の眼に、どのようにみえるかは知らない。しかし、わたし自身の眼には、「真理」の大洋がわたしのまえに未発見のまま横たわっているとき、海岸でたわむれつつ、ときどき普通のより

4 日

も一そうなめらかな小石、または一そうきれいな貝がらを見つけて、打ち興じている少年に似ていたように思える。



夏目漱石

(1867—1916)

この日生まれた明治大正期の文豪。当時の自然主義運動のそとにあり、余裕派と呼ばれた。『坊っちゃん』『明暗』『文学論』

日本の現代の開化を支配している波は西洋の潮流で、その波を渡る日本人は西洋人ではないのだから、新しい波が寄せる度に自分がその中で食客いそうろうをして気がねをしているような気持になる。新しい波はとにかく、今しがた漸くわきまの思いで脱却した旧い波の特質やら真相やらも弁えるひまのないうちに、もう棄てなければならなくなってしまった。……こういう開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません。またどこかに不満と不安の念をいだかなければなりません。……我々のやっている事は

5 日

内発的でない、外発的である。これを一言にしていえば、現代日本の開化は皮相、上滑りの開化である。

(現代日本の開化)



6 日

霞立つ長き春日を子供らと手まりつきつつ
今日もくらしつ

冬ごもり 春さりくれば 飯乞ふと
草のいほりを 立ち出でて 里にい行けば
たまほこの 道のちまたに 子どもらが
今を春べと 手まりつく ひふみよいむな
汝がつけば 吾はうたひ あがつけば
なはうたひ つきてうたひて 霞立つ
長き春日を 暮らしつるかも

良 寛

(1757—1831)

この日死んだ村の聖者。越後出雲崎の人。十八歳で
出家。諸国行脚ののち越後にすみ、無一文で托鉢に
生きた。詩歌と書にすぐれていた。図は自画自讃。



ペギー

(1873—1914)

この日生まれたフランスの文学者。既成宗教のダラクと資本主義の不正を批判した神秘主義的傾向の愛国者。第一次世界大戦に戦死した。

7 日
いまだかつて金銭がこれほどまでに、唯一の主人であり、神であったためしはない。そしてかくも富者が貧者にたいして防禦され、かくも貧者が富者にたいして無防禦であったためしはない。そしてかくも現世的なるものが精神的なるものにたいして防禦されていたためしはなく、かくも精神的なるものが現世的なるものにたいして無防禦であったためしはない。そしてかくも強者が弱者にたいして防禦されていたためしはなく、かくも弱者が強者にたいして無防禦であったためしはない。

(金 銭)



ガリレイ

(1564—1642)

この日フィレンツェに死んだ。イタリアのルネサンス期に、迫害に抗しながら、近代自然科学の方法を確立した先駆的物理学者。

8 日
自分が、その正しさを誰にも劣らずに信じ、かつ認めてきた結論が、後になって他の人によって、簡単に暴露せられ、その誤謬を指摘されるということ、……痛ましい、不愉快なことに相違ありません。私はこのような感情を、……新しく発見された真理を受けいれるよりも、古い誤謬にしがみつこうとする一種の病癖と欲望であると考えたいのです。そして、この欲望は、しばしば世人を誘惑して、ただ多数の、かつ無知な大衆の意見を刺戟して、自分の論敵の名声に対抗させたいばかりに、自分自身にとっても十分に明白な真理にたいして攻撃の筆をとらせるのです。

(新科学対話)

9 日

知識を世界に求め大に皇基を振起すべし

(五箇条御誓文)

旧来の陋習を破り天地の公道に基くべし

官武一途庶民に至る迄各其志を遂げ人心をして倦まざらしめんことを要す

上下心を一にして盛に経綸を行ふべし

広く會議を興し万機公論に決すべし



明治天皇

(1852—1912)

この日(一八六七年)即位。名は睦仁。明治維新を完成し、中央集権を確立することによって、近代国家日本を誕生させた。

10 日

われらの胸に自由がもえて
心がほまれに生きるかぎり
友よ 祖国にささげよう
われらの若いたましいの
うつくしいほとばしりを。
友よ 信ぜよ やがてこよなき幸の
星のかがやきのぼることを
そしてロシアは夢からめざめ
うち砕かれた専制政治のなごりの上に
われらの名前の書かれることを！

(チャダーエフに)



プーシキン

(1799—1837)

この日決闘に倒れた。烈しい感情と民衆的な美しい言葉で、ロシア近代国民文学の父となつた。革新思想の持主。主著『オネーギン』、『大尉の娘』、『プーシキン詩集』



雅 歌

*旧約聖書の中にあつて「ソロモンの歌」ともいわれる。イスラエル黄金時代の王ソロモンの作とされるが、もつと後の時代のもの。人間男女の情熱的な愛をうたったもので、旧約中最も文学的価値が高い。

見よ 冬すでにすぎ 雨もやみて はや去りぬ。

もろもろの花は 地にあらわれ 鳥のさえざる時す
でにいたり 山ばとの声 われらの地にきこゆ。い
ちじくの木は その青き実を赤らめ ブドウの木は
花さきて そのかぐわしきにおいをはなつ。わが愛
するものよ わが美しきものよ たちて出できた
れ。谷間におり がけのかくれどころにおる わ
がハトよ われになんじの顔を見せよ。なんじの声
をきかしめよ。なんじの声は愛らしく なんじの
顔はうるわし。われらのために キツネをとらえ
よ かのブドウ園をそこなう 小ギツネ
をとらえよ われらのブドウ園は花ざかり
なればなり。



ペスタロッチ

(1746—1827)

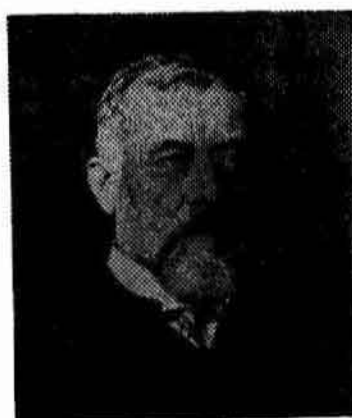
この日スイスに生まれた教育家。貧民救済、孤児教育につとめ、民主的な小学校制度や生活教育の理論を主張した。『隠者の夕暮』

人間は、かれが日常従事している労働のうちに、かれの世界観の基礎を求めなくてはならぬ。……かれは主として、自分の労働から自力で見聞を引きだすようにしなくてはならない。……であるから、あらゆる子供に教えられる知識は、かれの労働を中心として、集約されなくてはならない。

(『スイス新聞』より)

乾ききった大地が水をのぞんでいるように、民衆は知識を欲している。しかし民衆には、パンのかわりに、石があたえられている。

(リーンハルトとゲルトルート)



ベルツ

(1849—1913)

この日ドイツに生まれ、明治九年、医学の外人教師として日本に招かれ二十九年間滞在、東大教授として、宮中の侍医として活動した。

西洋の科学の起源と本質に関して日本では、しばしば間違った見解が行われているように思われる。

人々はこの科学を、年にこれだけの仕事をする機械、どこか他の場所へたやすく運んで、そこで仕事をさすことのできる機械と考えている。これは誤りだ。西洋の科学の世界は決して機械ではなく、一つの有機体であって、その成長には他のすべての有機体と同様に一定の気候、一定の大气が必要である。……日本では今の科学の「成果」のみを受取ろうとし、……この成果をもたらしした精神を学ぼうとはしない。

13 日

『日記』明治三十四年十一月二十二日



シュヴァイツァー

(1875—1965)

この日アルザスに生まれる。宗教哲学、熱帯医学を学んだのち、アフリカで原住民の治療と教化のために献身。ノーベル平和賞をうけた。

人間の意識の最も直接的な事実、「我は、生きんとする生命に取りまかれた、生きんとする生命である」ということである。……「生への畏敬」は、価値を創造し、進歩を実現し、個人および人類の物質的、精神的、倫理的な発展に仕えんことを志す。……われらすべては人間性を救うために、環境と戦わねばならぬ。また多くの人々が不利な社会状態の中にあつて人間性のために戦っている、ほとんど希望なき悪戦を、ふたたび希望あらしめるために、力をつくさなければならぬ。

14 日

(わが生活と思想より)



ナセル

(1918—1970)

この日生まれたエジプト大統領、一九四八年ナギーブと共にクーデタを行い、エジプトの独立を達成。一九五六年、スエズ運河の国有化を宣言。

地上のすべての民族は、二つの革命を経過する。

一つは政治革命で、これによってその民族は、彼らに押しつけられた専制者もしくは彼らの許可なくしてその領土を占有している侵略軍から、彼らの自治権を取りもどす。第二の革命は社会革命で、この中で社会の諸階級が互いに戦い、最後に全国民のための正義が獲得されて、状態が安定するに至る。……われわれエジプト民族の場合には、二つの革命をい

15 日

っしょに、しかも同時に通りぬけつつあるのであって、非常に大きな実験が、われわれを試練にかけているわけだ。(革命の哲学)



葛西善蔵

(1887—1928)

この日生まれた日本の小説家。「おせい」ものといわれる私小説、身辺雑記をかきつづけ、被害者の立場に身をおくことで庶民的共感を集めた。

16 日

ぼつねんと机の前に坐り、あれやこれやと考えて、思いのふさぐ時、自分を慰めてくれ、思いを引立ててくれるものは、ザラな顔見知合の人間よりか、窓の外の樹木——殊にこのごろの椎の木の日を浴び、光りに戯れているような若葉ほど、自分の胸に安らかさと力を与えてくれるものはない。……土地を売った以上は郷里の妻子のところに帰るほかない。人間墳墓の地を忘れてはならない。椎の若葉に光りあれ、僕は何処に光りと熱とを求めてさまようべきなんだろうか。我輩の葉は最早朽ちかけているのだが、親愛なる椎の若葉よ、君の光りの幾部分かを僕に恵め。

(椎の若葉)